

●「SHINWA WALK～伝説ぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

SHINWA WALK 27

七里の渡し伝説

伝説 ぞろ歩き

航海は
苦難の先に
花の園
若紫に
萌ゆるなり



桑名まで船で渡る宮の渡し

当時を偲ばせる常夜灯も

宮の渡し公園の西端に渡船場跡があります。これは、江戸時代、熱田の宮から桑名まで波に揺られて渡る船の発着場の跡。海路で七里(約28km)ということで、七里の渡し(宮の渡し)と呼ばれていて、熱田奉行が管理していました。また、四日市港に渡る、非公認の十里の渡しもあったといえます。

発着場は、常夜灯のある岸壁一帯で、渡し船はその東、東浜御殿付近から出港。渡船場には常に75隻の船が用意され、所要時間は約4時間、船賃は乗合で桑名まで、35～45文だったといわれています。

常夜灯は、寛永2年(1625年)、尾張藩付家老で犬山城主でもあった成瀬政虎が熱田の須賀浦に建立したものの。当時は聖徳寺に管理を任せていましたが、その後、承応3年(1654年)に現在の位置に移され、管理は宝勝院に任されるようになりました。寛政3年(1791年)、火災に遭い焼失しましたが、同年、成瀬正典によって再建され、今日に至っています。常夜灯は、もともと夜間出入する船の安全を確保する目的で設けられましたが、慶安4年(1651年)に夜間航行が禁止されてからは、夕方6時から翌朝6

時まで点灯して航行禁止の標識として機能していました。

渡し船は室町・鎌倉時代から行われていたといわれていますが、七里の渡しは元和2年(1616年)、すなわち大阪夏の陣の翌年からといわれています。

また、常夜灯の近くには鐘楼があります。延宝4年(1676年)、尾張藩二代藩主・光友の命令で、熱田神宮の南にある蔵福寺(浄土宗)に鐘楼が建てられ、宿場の人々に時刻を知らせていましたが、太平洋戦争で焼失。現在建っている鐘楼は、場所を移して常夜灯の横に復元されたものです。

ここは港としても重要でした。塩をはじめ米など食料物資の集散する港でもあり、伊勢湾の魚を陸揚げする魚市場が開かれていました。現在の大瀬子公園一帯が市場になっていたといわれていて、魚港としても船の往来で大変な賑わいを見せていたのです。



宮の渡し公園として整備されている七里の渡し跡。



スリングかつロマンチック

航海は男の人生の象徴

七里の渡しは熱田から桑名まで28kmで所要時間4時間ですが、ギリシャ神話にはトロイアから約1000km離れたイタケまでなんと10年もかかった物語があります。

オデュッセウスの冒険がそれ。トロイア戦争でのギリシャ軍勝利の立役者・オデュッセウスは、勝利後、部下を従え、船で故郷・イタケに向かいますが、なぜ10年という長い漂流の旅を強いられることになったのか。

その最大の原因は、キュクロプスの住む島でポセイドンの子・ポリュペモスを盲目にしてしまったこと。ポセイドンの逆鱗に触れたことで、オデュッセウスはこの後、数々の苦難に遭遇することになったのです。

しかし、捨てる神あれば拾う魔女あり。魔女・キルケから「立ち足る困難を打破するためには冥界に降りて、予言者・テイレシアスから助言を受けなければならない」と教えられます。キルケは太陽神・ヘリオスの娘です。オデュッセウスは冥界に降り、テイレシアスから「トリナキエ島の太



陽神の牛や羊を殺すことなく帰還のことだけ考えなさい」と忠告を受けます。

航海を続けたオデュッセウス一行は、トリナキエ島に到着し、ここで休むことにしました。太陽神・ヘリオスの牛と羊がのどかに暮らす美しい島でした。十分な休息を取り、いざ出発という時に、風向きが悪くしばらく待つことに。しかし、風向きは一向に変わらず、そうこうするうち、手持ちの食料が底をつき、空腹に耐えられなくなった部下たちが、オデュッセウスが眠った隙に太陽神の牛を殺し、その肉を焼いて食べてしまったのです。

これに激怒したのがヘリオスです。風向きが変わり出航した一行に制裁を加えます。突然強風が吹き荒れ、船に雷が落ち、船は無残に砕けて、オデュッセウス以外のすべての部下たちは命を落としました。

一人生き残ったオデュッセウスは流木にしがみついで漂流した後、オギュギア島に流れ着き、ニンフのカリュプソに助けられます。その後、イタケに向けて旅立つも、またしてもポセイドンから邪魔され、命からがらステリア島に漂着します。王女・ナウシカと出会い、王の計らいで、船と水夫を用意してもらい、故郷・イタケの地を踏むことができたのです。

しかし、10年にも及ぶ航海は、まさに波乱万丈、冒険と熱愛の日々でした。実際、キルケとカリュプソには子供まで生ませています。航海は、スリルとロマンスに満ちた、男の人生の象徴なのかもしれません。とはいえ、すべてはゴールしたからこそできる回顧です。



※次回は喚続神社の隕石伝説について特集します。お楽しみに。

■ 写真/Kiyoshi K ■ イラスト/Rei
■ 取材・文/Icarus